

# ことばの機を織るエドワード・テイラー

岩瀬 悉有

## 1 イメージの読み替え

十七世紀の詩人エドワード・テイラーの「蠅を捕らえる蜘蛛について」*“Upon a Spider Catching a Fly”*と題する詩に見られる蜘蛛のイメージの意味深さについては、以前に論じたことがあるので繰返すことは控えるとして、そのイメージが暗示するもう一つの意味をここでは検討しようとしている。それは、蜘蛛のイメージが十七世紀にイギリスからアメリカに移されることによってそこに負荷されていた意味が、根本的に変質したということである。

テイラーとは、同時代のイギリスの詩人ジョン・ダン John Donne (一五七二—一六三二) は、「一切のものを変質させ／マナを胆汁に変える蜘蛛の愛」*“The spider love, which transubstantiates all, / And can convert Manna to gall”* という詩行を「トウィックナム庭園」*“Twickenham Garden”* で書いている。ここに使用されている「変質させる」*“transubstantiate”* という言葉は宗教論争とも関係して、当時の詩の読者に豊かに響いたことであろう。十六世紀に遡るならば、カトリック教徒と新教徒の論争があり、ジョン・ヘイウッド John Heywood (一四九七—一五七八) の戯曲『蜘蛛と蠅』*The Spider and the Fly* (一五五六) はその当時の宗教事情を描いている。ここでは蠅はカトリック教徒、蜘蛛は新教徒ということになっている。この両者が窓ガラスのところで騒々しく争っているところに、箒を持った女中

が登場し、蜘蛛の巣をたたき落して両者の長い争いに決着をつける。そして、その女中がメアリー女王であったというのが、この戯曲の一つの寓意的解釈である。

ヘイウッドは新教徒の広がりに対して投獄までされたこともあるカトリック教徒である。旧約聖書の「イザヤ書」第五十九章第五―六節「彼らは蝮の卵をかえし、くもの糸を織る。その卵を食べる者は死に、卵をつぶせば、毒蛇が飛び出す。くもの糸は着物にならず、その織物で身を覆うことはできない。彼らの織物は災いの織物、その手には不法の業がある」を一つの例として、イギリス文学では蝮、蜘蛛、蛇は神の敵とみなされ、悪と破壊を働くと考えられている。アメリカの書きものにおいても、テイラーの毒蜘蛛をはじめとして、ピューリタン神学者ジョン・エドワーズ Jonathan Edwards（一七〇二―一七五八）も蜘蛛を「墮落をもたらす空のけがらわしい輩」<sup>(1)</sup>と称しているし、また、生前未発表の『聖なるもののイメージあるいは影』*Images or Shadows of Divine Things* においても蜘蛛を悪魔タイプ<sup>(2)</sup>に入れている。これらはイギリス側に見られる悪者としての蜘蛛のイメージを継承していることになるであろう。

ところがテイラーの蜘蛛は「毒を持つ」奴と言われながら、「自然をたのみ」として生き残る奴でもある。網にかかった蠅と蜂の扱いをたくみに区別することによって、詩人に賛美の念を抱かせることになっており、このことを考えると、この蜘蛛は「マナを胆汁に変える」蜘蛛とはたしかに違う一面を持っていることになる。

テイラーには体験に基づくものと想定される蜘蛛に噛まれることを書いた詩がある。瞑想詩第一集、第四十七番がそれである<sup>(3)</sup>。

私が天使の輝きを全身に着こみ

すべての衣類がバラの香に包まれ

ことはの機を織るエドワード・テイラー

「」とばの機を織るエドワード・テイラー

四八

天国の色に深く染めた輝きを持ったその時に、  
一匹の蜘蛛が私の頬に毒を吐きかけた。

When I wore Angells Glory in each part

And all my skirts wore flashes of rich die

Of Heavenly Colour, hedge'd in with rosie Reechs,

A spider spit its Vomit on my Cheeks.

このように始まる第一連では、蜘蛛は天国に敵対する毒蜘蛛として規定されている。そして第二連においても、神の国に入る人の邪魔をしている蜘蛛の毒のことが書かれている。

この呪われた斑点に注ぎ込まれた痛い汁

それが魂と肉体の両方に拡がり、

どの繊細をも汚し、ぬらし、どの組織をも毒する。

斑点全体が醜く腫れあがり、

穢れて不かつこうな腫れの山はあまりにも高くて大きく、

神の国の狭き門をくぐる事ができない。

This rankling juyce bindg'd in its cursed stain

Doth permeat both Soul and Body : soile  
And drench each Fibre, and infect each grain.

Its ugliness swells over all the ile.

Whose stain 'd mishapen bulk's too high, and broad  
For th' Entry of the narrow gate to God.

そして、毒に汚れた人間の墮落を救うものとして取り上げられるのが、自然の薬草である。この薬草が「足元」に生える野草、つまり、アメリカの自然の治癒力であることに注目したい。

このように今にも破れ、地獄で燃えんばかりのその時に、

私はふと足元に薬草が芽を出すのを見つける。

その葉から落ちる香油のしずくは毒を消し、

すべてのしみを取り去り

浴すれば輝く美人を送り出す湯。

主よ、私にこの薬草の葉を食べさせてください。

Ready to burst, thus, and to burn in hell :

Now in my path I finde a Waybred spring

Whose leafe drops balm that doth this venom quell

「この機を織るエドワード・テイラー

And juyce's a Bath, that doth all stains out bring  
And sparkling beauty in the room convey.

Lord feed me with this Waybred Leafe, I pray.

蜘蛛に噛まれたことが動機となつて、テイラーは薬草を神に祈ることになる。ここに名前の出てくる「おおばこ」Waybredを、虫に刺された時などに使用するのが、当時の民間療法であつたと考えられる。この日常的で陳腐なイメージを救っているものは、蜘蛛の毒が体にまわる痛みが、同時に神の恩寵に目覚める喜びの痛みに転じることができるところにある。その意味で、この詩のモットーが「マタイ伝」第二十五章二十一節の「汝の主人の歓喜に入れ」であることが注目されるし、また、この詩の冒頭の二行が、

ふしぎ、まことにふしぎ、その拍車は私の心を

悲しみの針と最大の喜びの針とで突き刺す。

Strange, strange indeed. It rowell doth my heart

With pegs of Greefe, and tents of greatest joy.

であるように、蜘蛛に対するテイラーの態度はジョン・ダンのそれとは根本的に違つており、喜びと悲しみという「ふしぎな」相反的感情を見せているのである。伝統的に負の価を担わされているけがらわしい蜘蛛を、一応は毒蜘蛛と規定しながらも、テイラーはなぜ再評価しようとするのであろうか。彼が牧師を勤めたマサチューセッツ州ウェ

ストフィールドが、当時はまだ文化らしいものをほとんど持たないフロンティア社会であったことも関連して、荒野で生き残るためには自然原野の薬草を見つけるナチュラリストの眼が必要であったと言ってみるのも、一つの説明になるであろう。荒野では反自然的な行為は身の破滅になることは必至である。しかるに新大陸に入ったピューリタンたちは、アメリカの自然である原始の森を恐れ、特定の神学が支配する彼らの唯一の文化的環境にしがみついた。フロンティア社会に顕著な自然と文化の対立が、テイラートの蜘蛛の詩の汎神論とピューリタンの寓意の対立に反映されている。この対立の中で自然のイメージをどのように再調整して文化の中に取り入れるかという問題が生じていた。テイラーが見せた毒蜘蛛のイメージの再評価は、この再調整の一つの例である。

テイラーはこの再調整を、彼の詩の言葉の上においても実践している。例えば「蠅を捕える蜘蛛について」の第六連で、汎神論的な結論が述べられていた。「自然をたのまぬものは／くたばる」というこの個所は顕著に口語的な表現である。詩人は知的に理解している教義に心情的な理解の裏付けをしようとして蜘蛛を観察し、そこで見つけた言葉が「くたばる」*goes to pot*であった。この表現は上品な詩の読者のひんしゆくを買うかも知れない。「なべに送られる」から、「だめになる」といった意味になっている。自然界の生き物は言うに及ばず、フロンティア社会の人間を支配している大自然の法則は、彼らの生命維持のための原理である。したがって自然の法則は神学的に高遠な表現を必要とするものではない。むしろ、日常化されたものである必要がある。自然の真理は上品で抽象的な表現を寄せつけないばかりか、逆に、日常的な言葉によつてはじめて表現される直接的真理であつたはずである。新しい大陸の自然の影がこのような形でテイラーの詩の中に侵入してくることに、我われは注目したい。

これと同様のことはテイラーの詩の押韻形式の不規則性についても言える。彼の大学教育はイギリスで完了したものであるし、彼に最も近い詩人はイギリスのジョージ・ハーバート George Herbert (一五九三—一六33) であると言われている。それにもかかわらず彼の詩が日常的な表現やイメージを使い、また不規則な韻律をもっていることに

ついては、「荒野」の状況を考慮しなければならないであろう。二十世紀になって編集されたテイラーの詩集に序文をつけたルイス・L・マーツが述べている。「こうしてこの詩人の神との会話は、イギリスに住む瞑想の詩人が決して使わないと思われる言葉によって語られている。なぜなら、瞑想に入った魂は、その人自身が自然に語り出すように語るものであり、それ以外の言葉はどれもみな不誠実で偽りのものになるであろう。そこでテイラーは、学ある言葉と粗野な言葉、抽象と具体、上品と下品の言葉の独特な混交によって語っている。というのは、このような区別は荒野には存在しないからである。」<sup>(4)</sup>

テイラーの蜘蛛はイギリスの蜘蛛を兄弟としながらも、アメリカの荒野的フロンティアに移されることによって、新しい価値を持ち始めた、読み直された象徴の一つである。孤独でせつせと働く蜘蛛の姿の中に、たとえそれが悪知恵を働かせる毒蜘蛛であるにせよ、(カトリック教徒からは、新教徒は蜘蛛だと軽蔑された)、濃密な神の空気に包まれて神の国の建設に献身する十七世紀ニューイングランドのピューリタンの姿を詩人は読み取ったのではないかと考えられる。

## 2 織ること

テイラーの蜘蛛の詩は蜘蛛が糸を紡ぎ、巣を編む行為を手掛りとして、神と自然と人間(あるいは詩人)の三者の関係を発見するものであった。詩人は神を理解するために、自然の生き物である蜘蛛を仲介者としている。十七世紀の詩人であるテイラーは自然と人間社会の事象を、神の意図を映すイメージとして把握しており、それを解釈することによって神意に接しようとしていた。テイラーの詩にしばしば出てくる「紡ぐ」「織る」といった一連のイメージは彼の思考方法をつよく反映している。

彼は「技術、すなわち自然を模倣するもの」と言う。自然界の蜘蛛の営みを模倣する形で人は糸を紡ぎ、布を織る。そして衣服をつくる。これらの作業は当時のピューリタンにとっては重要な日常作業の一つであったことは、「家事」「Huswifery」と題する彼の詩にも見ることができる。また彼は絶対的超越者である神を、日常的に実感するために、さまざまな職人の比喻を使っている。その中で織工の比喻が中心的位置をしめていることを、早くはノーマン・S・グレイボウの論文「エドワード・テイラーの精神的家事」(一九六四)が雄弁に指摘している。この論文は、織ることと着ることがテイラーの初期の詩からその後も、一貫して使用される重要なイメージであることを述べ、「完成した織物」が詩そのものの暗喩となつて「神を賛美し、賛美を通して詩そのものに、神の栄光を取りつける」<sup>5)</sup>と言う。私はこれに追加して、詩人の行為の根底に蜘蛛の営みを位置づけておきたい。蜘蛛が詩人の暗喩として意識されているからである。テイラーにとつては神も織工であり、その「聖なる織機」によつて世界を織り出す。神と人間(詩人)と蜘蛛とを、織るという行為によつて基本的に同一線上の行為としている。それは蜘蛛 Spider が語源的に Spin「糸を紡ぐ」「巣を掛ける」ということばとつながり、また、Weave「織る」の名詞形 Web は、人がつくる織物でもあれば、蜘蛛の巣でもあり、さらに織られたもの Texture は、織物、文章そのいずれについても使えることばであるからである。このような言葉のつながりは思考のつながりを暗示しており、テイラーの詩においては巣を掛ける、織る、書くという三つの行為を基本的に同一のものだとする類比的思考がひろがつており、豊かなイメージ群を形成している。

テイラーの瞑想詩第一集、第四十六番には、完璧なピューリタンになるために、神の織り上げた「天国の一番美しい装い」、つまりは「白い服」White Raimentをいただくことを祈る詩行がある。この白い服には地上の権力者を包む豪華絢爛たる衣服を「色褪せて」見せるほどの輝きがあると書かれている。



ことばの機を織るエドワード・テイラー

五四

私は泥の塊、この私を

聖なる機<sup>ハタ</sup>で織ったあなたの織物で

朝にも、いや、天使の輝きにも勝る

光輝の、純白の織物で飾って下さるのですか。

これは朝も天使も着ない織物。精巧な真白のこの寒冷紗、

主よ、これはあなただけが着るもの、あなただけの着物です。

(第三連)

I'm but a Ball of dirt. Wilt thou adorn

Mee with thy Web wove in thy Loom Divine

The Whiest Web in Glory, that the morn

Nay, that all Angell glory, doth ore shine?

They ware no such. This whiest Lawn most fine

Is onely worn, my Lord, by thee and thine.

神が織る「純白な織物」は、人が作る「真白な寒冷紗」から連想されたものであろうが、さらに、自然界の白い織物である蜘蛛の巣への連想をも伴っている。「朝に勝る白い織物」という表現は、夜のうちに編まれた蜘蛛の巣が、しばしば朝になって詩人の目にとまり、詩の材料になってきたことと関連している。このような連想のひろがり、少々突飛であることを詩人自身が知っていたかのように、第四連の冒頭には次のような弁明の言葉がある。

この言葉は機智の羽ばたきでもなく、奔放な頭脳の中で新しく鑄造された気まぐれな空想でもない。

この詩の中でテイラーは自分の姿を神との比較においてさまざまなイメージで描いている。「小さな樽」「わらぶきのボロ小屋」「泥の塊」「土くれ」「枯れた切り株」がそれであり、それらはニューイングランドの農夫の生活と結びついている。中でも最も大胆なのは車の比喩である。彼は自分を「肥し車」「Tumbrel」と呼び、「下肥をすっかり降して清められ／車輪がひび割れ、車軸が悲鳴をあげるまで／恩寵を豊かに山積みして下さい」（第八連より）と祈っている。これはテイラーの詩にときどき見られる糞尿に関する言葉であり、上品な言葉にはない迫力をもって、恩寵の現実性を訴えている。

最も見事な例の一つとして、第一連には次のような形而上的なイメージもある。

私は鈍い元素の寄せ集め、

邪悪な霊が住む蝸牛の殻である。

I'm but a jumble of gross Elements

A Snail Horn where an Evil Spirit tents.

これと対比されるのが、第五、六連の神からいただく「白い服」である。

ことばの機を織るエドワード・テイラー

「天使の」織物は豊かな絹の織り、

精巧な作りで、全体に柄のある琥珀織り、

けれども、このあなたのものは乳よりもはるかに白く、

神の糸車で紡ぎ、

布に織り上げ、あなたの工場で手で縮充したもの、

着飾る天使をも色褪せて見せる。

この織物は、天の選りすぐりの糸にだけ使う

最上の高貴な技術により織られたもの。

全体に柄があり、部分を埋める花模様は

楽園の輝く花ばかり。

それは比類のないあなた一人の着物、

あなたに一番大切な、栄光の聖者の着物。

Their Web is wealthy, wove of Wealthy Silke

Well wrought indeed, its all brancht Taffity.

But this thy Web more white by far than milke

Spun on thy Wheele twine of thy Deity

Wove in thy Web, Fulled in thy mill by hand

Makes them in all their bravery seem land.

This Web is wrought by best, and noblest Art

That heaven doth afford of twine most choice

All branch, and richly flowered in every part

With all the sparkling flowers of Paradise

To be thy Ware alone, who has no peere

And Robes for glorious Saints to thee most deare.

ここでは主が最高の織り手として理解されていることは明らかである。さらに機織りの工程が「縮充」や柄模様、色合いにいたるまで、具体的に描かれていることも特徴的である。しかも、主の織る「純白の服」が朝の輝きに勝り、「乳よりも白く」「雪よりも白く」（第七連）という表現が、主が人と自然の両方に勝るものであることを示している。

ところがこの純白の服はテイラーの独創的イメージではない。この詩のモットーが示すように、それは「黙示録」の「白い衣」を「予型」（タイプ）として理解するところから来ている。「勝を得る者は」白い衣を着せられん」（第三章第五節）がその個所である。この予型を実現する「対型」（アンチ・タイプ）はキリストその人である。この予型と対型を認識することによって、詩人はじめ、比喩の世界の農夫に新しい意味が授けられている。ここには十七世紀アメリカのピューリタンに特徴的な予型論的想像力が働いていると考えられるが、その中では神と人間の関係が往復的に理解されている。神が白い服を人間に授けるのに対して、人間は神を織工とする類比的理解をもってそれに応

じる。さらに、機織りの技術が基本的に自然界の蜘蛛の行為の模倣であることを想起すると、白い衣を織る行為を通じて、神と人間と自然とが密接な関係の中でとらえられていることになる。これがピューリタンの精神生活の一つの理想形であつたと言える。ところが、それと同時に、その密接な関係があるとしても、神と人間の間には絶対的な差異があるとすれば、その差異を超えるものとしては、詩人（人間）の側からの祈りが大切になってくる。詩人の願いは当然のことながら彼自身が神の操る「紡ぎ車」となり、次には「機織り機」となつて、「神の言葉を糸として」聖衣を織り出し、そして、それを着ることを祈ることになる。先に言及した「家事」という詩はそのような形式で書かれている。

### 3 書くこと

ピューリタンにとつて糸で織ることと、言葉で書くこととは、基本的同一の象徴行為であつた。けれども詩人は、詩人の言葉と神の言葉との絶対的な差をも知っていた。詩人一人が神を持たずに言葉を綴つてみても、文章にはならないとの自覚である。これは古典の詩人たちがミューズの女神に祈ることから詩作を始めたのに似ており、ピューリタン詩人には神への祈りからの出発がある。したがつて、蜘蛛が自身の体内から糸を紡ぎ出して網を編むという自立的な行為は、ピューリタン詩人には成り立たない。そのような自立的な創造行為は、むしろ神の領域のことだと考えられた。神がつくるリアリティーとは違つたリアリティーを、詩人が独自につくるといふ近代的な自我の意識は、ピューリタン詩人には許されない。テイラーも彼の瞑想詩集の冒頭の「序詩」でこのことに言及している。

たとえ天使の羽根のペンを持ち、

磨いた宝石の上で先を鋭くし、

金色の液をつけて巧みに動かし、

透明な紙の上に金の文字を書いてみても、

あなたがペンと書き手をこしらえて下さらなければ

インクはにじみ、ペンはさしみ、ぎやぎやの文字になるだけでしょう。

(序詞第二連)

If it its Pen had of an Angels Quill,

And Sharpend on a Pretious Stone ground tite,

And dipt in Liquid Gold, and mov'ed by Skill

In Christall leaves should golden Letters write

It would but blot and blur yea jag, and jar

Unless thou mak'st the Pen, and Scribener.

テイラーが詩の中で言葉を問題にすると、神の言葉によって支えられることのない詩人の言葉の不完全性を述べるのが普通である。これは神を絶対的で中心的な原理とするピューリタン社会の詩としては当然なことである。次の詩の例においても、「編む」と「書く」の用語を重ねて詩人一人だけの言葉の不完全さを語っている。

主よ、天使のわざでダマスク織りのピロードの詩を編み、

御業を飾るために豊かな思想を求め、

ことばの機を織るエドワード・テイラー

ことばの機を織るエドワード・テイラー

六〇

銀の道具で山脈の中を掘り進みても、

私の織物はちぎれてボロになるでしょう。

織り端の糸にいたるまで

すっかりもつれていいるのですから。

(瞑想詩第二集五六番)

ここでは書くこと織るといったイメージの他に鉋脈を掘るイメージが付け加えられて、色彩豊かになっている。この一連は「豊かな思想」がなくても、イメージそのものだけで自立できるだけの文学的質をそなえているように思える。けれどもテイラーにとつての詩的イメージ、さらには彼の詩自体は「御業を飾るため」にあり、教義を心情的に実感するための道具であるとする原則と限界を決してくずすことはなかった。むしろ、この原則と限界を守ることによって、逆に、比喩表現が自由に繁茂し、形而上的で、また、ときにはバロック的な表現形式の詩行が完成して行つたと言える。

詩人が自らを神の道具としての織機だと規定する意味もそこにある。織る主人は神であつて、自らはその創造の行為の道具であると言うのである。先にも言及した「家事」という詩は、ピューリタン詩人としてのテイラーの自己規定の詩となっている。

お、主よ、私をあなたの完全な紡ぎ車にして下さい。

あなたの聖なる言葉を私の綿巻棒に、

私の愛情を軽やかに廻るはずみ車に、

私の魂を糸巻の枠に

私の交わす言葉を糸巻にして、

そこに、あなたの輪で紡いだ糸を巻きつけて下さい。

(第一連)

Make me, O Lord, thy Spinning Wheele compleate.

Thy Holy Worde my Disaff make for mee.

Make mine Affections thy Swift Flyers neate

And make my Soule thy holy Spoule to bee.

My Conversation make to be thy Reele

And reele thy yarn thereon spun of thy Wheele.

これに続く第二連では「私を織機」として布を織ることを、第三連ではそれに続いて、その布で「私の理解、意志、感情、判断、良心、記憶、言動を包む」ことを祈る詩行が綴られている。詩人が全身全霊をもって主の御業のための道具となり、主に包まれることを願っている。自らを道具視することはその道具を使用して日常一般に行われる当時の労働を暗示している。けれども労働の意味はピューリタン詩人にとっては二重である。一つは、当時の人々の生活を支えるために欠かすことのできない労働の現実性そのものであり、もう一つは、その現実そのものの労働を神の視点から読み替えるときにでてくる寓意の意味である。紡ぐ、織る、着せるという日常の行為が、ピューリタン個人をつくるということ、さらには、それが神の国を地上に建設するための象徴的行為の一部となっているということである。テイラーはこのピューリタンの象徴行為を、言葉を紡ぎ、編み、詩というテクスチャールをつくることによつて明らかにしようとしたのである。



注

- (1) *Jonathan Edwards: Representative Selections*, ed. Clarence H. Faust and Thomas H. Johnson (1935; New York: Hill and Wang, 1962), 8.
- (2) Jonathan Edwards, *Images or Shadows of Divine Things*, ed. Perry Miller (New Haven; Yale University Press, 1948), item 160.
- (3) 使用テキストとして *The Poems of Edward Taylor*, ed. Donald E. Stanford (New Haven: Yale University Press, 1960) ㊦㊧㊨°
- (4) Louis L. Matz, “Foreword,” *The Poems of Edward Taylor*, xxxvi.
- (5) Norman S. Grabo, “Edward Taylor’s Spiritual Huswifery,” *PMLA* 74 (December 1964), 556.